

「井口喜源治」の教育実践に関する一考察
－「教育課程論」及び「教育方法論」における教材化の可能性－
A Study on the Educational Practice of “Iguchi Kigenji”
- The Possibility of Making Educational Materials in
"Curriculum Theory" and "Educational Methodology" -

百瀬光一¹・石川勝彦²・下崎 聖³

Momose Koichi¹, Ishikawa Katsuhiko², Shimozaki Sei³

1 はじめに

井口喜源治記念館(長野県安曇野市穂高 4312)が主催している「井口喜源治先生に学ぶ会」(以下、「学ぶ会」と略記)が毎年4回開催されている¹⁾。その記念館のホームページには、「井口喜源治」について以下の解説がなされている。

井口喜源治先生は、明治3年安曇野市穂高(当時:東穂高村)に生まれ、松本中学校(現松本深志高)から明治法律学校に進みましたが、学業半ばで長野県の小学校の先生となり、上高井の小布施小学校、松本開智小学校、東穂高小学校に勤務しました。

東京新宿中村屋を開業した相馬愛蔵(穂高出身、井口先生とは同級、松本中学校で共に学び、東京専門学校を卒業、北海道に渡り帰郷)等の始めた東穂高禁酒会に加わり“芸妓置屋設置”の反対運動を続けた為、排斥され公職を去りました。

明治31年 相馬愛蔵、兄 安兵衛、白井喜代ら地域の人格者の協力援助を受けて、私塾「研成義塾」を設立しました。当時、因習にとらわれた農村にあつて、幾多の困難をのりこえ、小学校を終えた子女に「自由と独立」を基にした家庭的な教育を行いました。教師は井口喜源治 一人、英語・数学・漢文や彼の信仰するキリスト教の聖書などを教えました。

研成義塾の目的は、「よき人」になることであり黙々と農村の青年の教育に励み明治・大正・昭和と34年間、700余名の人たちを世に送り出しました²⁾。

第一筆者は、令和2年度より、この「学ぶ会」に自己研鑽の場として参加している。そこで本稿では、今までの「学ぶ会」での学習成果の第一次報告として、井口喜源治の教育実践の現代的意義について考察し、更に第一筆者が担当する教職科目「教育課程論」及び「教育方法論」における、井口喜源治の教材化の可能性について検討することとした。

なお、井口喜源治に関する先行研究の中で、井口喜源治の教育実践を現代的観点、例えば現行学習指導要領等から捉え直したものはまだない³⁾。この点が、本稿の意義である。

2 井口喜源治の年譜と教育実践

¹ 山梨学院大学 ² 鳴門教育大学 ³ 中京学院大学短期大学部

2.1 井口喜源治の年譜

表1 井口喜源治の年譜の概要

年月	主な出来事等
明治3年5月3日	長野県南安曇郡穂高町に生る。
明治22年6月12日	長野県立松本尋常中学校を卒業。在学中、米人宣教師エルマー（英語教師）によりキリスト教に開眼さる。後明治法律学校に学ぶ。
明治23年9月	明治法律学校中退後、上高井高等小学校小布施分校の教師として赴任す。
明治25年9月1日	松本尋常高等小学校（後の開智学校）に高等科4年担任として招かれる。
明治26年4月10日	家事上の都合により東穂高高等小学校に転任す。
明治26年12月20日	相馬愛蔵、望月直弥氏らの創立した東穂高禁酒会に入会す。
明治27年3月24日	村内への芸妓置屋設置問題に対し、相馬愛蔵、望月直弥氏らを初めとする禁酒会員その他と共に精力的な反対運動を始める。
明治31年11月7日	反対運動の甲斐もなく芸妓実現後、校内の風紀も極度に乱れ、謹厳なる先生は、却って校長初め同僚教師らの卑劣なる排斥にあい（芸妓置屋設置賛成者らの迫害もあり）葛藤の末遂に豊科小学校に転任を命ぜられたが、間もなく自ら退職し、相馬愛蔵氏らの勧めもあり、村内有力者臼井喜代、相馬安兵衛（愛蔵氏の兄）らの協力を得て研成義塾を創立、東穂高村矢原集会所を仮校舎とする。
明治32年2月11日	荻原守衛氏と同行東京に行き、巖本善治・松村介石氏に会う。初めて帝国議会を見る。
明治32年7月8日	午前4時、床にありて俄然として自得し、自ら30年来の非を悟り、ここに自然の大法に意志あるを感じ、自ら「新たな生涯に入りしことを知る。願わくは、この清き心をして永遠に保たしめたまえ、愛する神よアメン。起きて田畔を歩す。天地その景象を改ため星光赫奕として神意を語るがごとし」と認めたり。
明治33年7月25日	荻原守衛氏と上京中、内村鑑三先生の講習会に列し、終了後、共に東海道を下り、富士山に登り、甲州路を旅して相携えて帰る。
明治34年1月1日	東穂高村三枚橋に新校舎を建設、新年式を挙ぐ。
明治34年4月20日	義塾設立認可さる。
明治34年9月22日、23日、24日	内村鑑三先生の講演を義塾に開く。
明治36年9月	内村鑑三先生再び来り、義塾において講演さる。
明治43年4月22日	荻原守衛氏東京にて死去、愛惜の情に堪えず。
明治43年10月15日、16日の両日	義塾創立満12年感謝記念会を催し、内村鑑三先生・斎藤宗次郎・木村孝三郎・海保竹松氏ら来塾講演す。
明治43年11月20日	裁縫科を創め、青柳さく子氏来塾、歓迎会を開く。
大正5年5月11日	南安曇郡長野々村亨参観に来たる。この時代に義塾の経営困難なるを知り、補助金の交付方しばしばありたれども、その都度謝絶したり。
大正9年12月15日	午後2時、郡役所へ行き、郡長白田松太郎氏・郡視学渡辺恒平氏に面会、金150円受取る。
大正10年3月31日	研成義塾の裁縫教師として信望厚かりし青柳さく子女史、心臓病にて俄かに昇天さる。
大正12年	4月より裁縫科教師として宮沢ふさ氏就任。
昭和3年12月2日	研成義塾創立満30年の記念会を穂高町小学校に開く。
昭和5年3月28日	内村鑑三先生死去す。
昭和7年10月20日	午後1時、脳溢血症にて倒る。以来腰立たず、臥床のまま書斎に横たわる。
昭和8年5月9日	山室軍平氏見舞に来たり、病床に侍し祈禱す。
昭和11年9月20日	閉舎のままなる義塾校舎を取り壊さんとするに先だち最後の集りをなす。門弟8人相寄りて、先生病氣平癒の祈禱を捧げ、懐旧の情にしばらく去りかねたり。
昭和13年3月23日	病氣につき当日付にて廃校届を県知事あて発送す。
昭和13年3月29日	研成義塾廃校認可さる。
昭和13年7月21日	午後11時病あらたまり、ついに永眠す。行年69歳。

先のホームページより引用した井口喜源治の解説文を補うため、井口喜源治記念館が1978年に発行(改訂再版発行)した、丸山毅編『井口喜源治』⁴⁾を基にしなが、井口喜源治の年譜の概要について表1にまとめた。具体的には、この文献の中で武井文雄が著した「井口喜源治先生年譜」⁵⁾の箇所を第一筆者が本研究に関わる年譜を抜粋し、表1として引用した⁶⁾。

ここから、中村屋を開業した相馬愛蔵の他、内村鑑三や荻原守衛(礫山)らとの深い関わりも確認することができる。

2.2 教育実践

井口喜源治の教育実践について、先の丸山毅編『井口喜源治』井口喜源治記念館、1987年にある「研成義塾設立趣意書」及び「追憶記」から探ることとする。

2.2.1 研成義塾設立趣意書

井口喜源治記念館のホームページでは、「研成義塾」について「当時の因襲にとらわれた農村にあって小学校を終えた子女に、研成の精神をいかした『自由と独立』を基にした家庭的な教育が施されました」⁷⁾と説明がなされている。

さらに、「研成義塾設立趣意書」には、研成義塾が生まれた目的を「文明風村塾的の真教育を施さんがためなり」⁸⁾とし、その上で以下の6つの企図を示している。

- 一、我が塾は家庭的ならんことを期す
- 二、我が塾は感化を永遠に期す
- 三、我が塾は天賦の特性を発達せしめんことを期す
- 四、我が塾は宗派のいかに干渉せず
- 五、我が塾は新旧思想の調和を期す
- 六、我が塾は社会との連絡に注意す⁹⁾

一の「家庭的」とは、「なるべく家庭団欒の状況に模倣するものにして、器械的・他人行儀的に流れず、教師は学生を子女のごとく愛し、学生は互いに同胞のごとく和し、苦楽を分つ風儀の間に品性の修練を成就せんと勉むるものなれば、我が塾は学生の多数を望まず」¹⁰⁾とし、少人数のまさに家庭的な塾が目指されている。

二については、「(前略)学生退塾の後といえどもその生涯の出来事については常に相談相手となりて慰撫規正し、感化の永遠に持続せんことを期するものなり」¹¹⁾とし、在塾期間だけでなく、退塾後も常に相談相手となり、学生を支援することが目指されている。

三については、「(前略)子細に学生の性情を察し、おのおの適応なる生ける教導を与え、その一生の方向に最も有効なる進歩の慣習を与えんことを期するものなり」¹²⁾とし、個々の学生の特性に応じた教育が目指されている。

四については、「(前略)神儒仏耶いずれの宗教を信ずとも学生の自由に一任し、決して一定の宗教を強うるがごときことをなさず」¹³⁾とし、井口喜源治が信仰したキリスト教に限定せずに、「主として宗教観念の根底的精華を発達せんことを期す」¹⁴⁾としている。

五については、「我が塾は一方においてはいにしえにおける武士道の朴直・儉素・貞淑の風を存し、一方においては日進の時勢にかんがみて自由・快活・勇進の風を養い、守旧・激進のいず

れにも編せず、学科も和・洋・漢の三者を適宜に配当し、女子に対しては特に裁縫・女礼・齊家・育児の要を伝えんことを期すべし¹⁵⁾とし、不易流行を踏まえながらバランスの取れた教育が目指されている。

六については、「(前略)我が塾においては社会との連絡に注意し、有用の図書を備えて有志者の縦覧をゆるし、時に夜学を開きて晩学篤志の人を導き、知名の士人に講話・実歴談を乞い、又は学生をしてその学ぶところを実際に試みて自ら発明するところあらしめ、且つ評議員若干名を置きて種々の計画を合議すべし¹⁶⁾とし、社会に開かれた塾及び教育が目指されている。

この「研成義塾設立趣意書」の6つの企図は、現代の学校教育においても示唆に富んだものが含まれている。

2.2.2 追憶記

「追憶記」には、研成義塾の支援者や、教え子たちが寄稿している。ここでは、その中で具体的な教育実践が伺えられるものを抜粋し、示すこととする。

研成義塾出身者であり、評論家であった斎藤茂は、井口喜源治自筆の研成義塾時間表を示している。表2は、それを基に第一筆者が表したものである¹⁷⁾。更に斎藤は、以下の説明等も付記している。

表2 研成義塾時間表

土	金	木	水	火	月	時 間 表
漢 文	國 語	道 話	漢 文	國 語	道 話	
英 語	英 語	英 語	英 語	幾 何	英 語	
幾 何	歴 史	幾 何	習 字	英 語	習代 字數	
	動 物	地 理	公 民	圖 画	作 文	
	珠 算	用 器 画	鑛 物	歴 史	地 理	

「道話」には主にキリスト教の大綱を話されたが、あまり主義に拘泥せず、ごく自由に、文字通りの道話で、時間は2時間と、少ない。(後略)

「英語」が6時間で、毎日あり、この課目を重く扱うことは創立以来一貫していて、新時代の趨勢に応ぜんとするの用意。

「国漢」の4時間を、朝の第1時間に「道話」と並べ置いたのは、この課目を精神的に扱ったことが察知される。いわば和魂漢才の培養か。漢文の教科書に論語・孟子等、四書を用いるのも30年来改めず。

その他、必要科目を適当にあんばいし、「習字」の日本性を軽しめず、また早いころ(20年前)、「珠算」を採り入れたのは見識というべきか¹⁸⁾。

相馬愛蔵の妻である黒光が寄稿した「試練の村塾」には、以下の記述がある。

研成義塾の教育は教師と生徒ではなく、人と人が相対し、教え子は一人一人の個性を師の前に呈示して、およそ一問一答的に靈魂の陶冶をめざす教場であった。ここには個々の特性を没し勝ちであるという画一教育の無理はなく、全員ことごとくその持ち前を發揮して、長所はいよいよ伸長し、短所は直ちに指摘される¹⁹⁾。

研成義塾出身者であり、外交評論家であった清沢洌が寄稿した「無名の大教育家」には、以下の記述がある。

(前略)行ってみると、この研成義塾には先生が一人しかいない。生徒はと見ると、高等小学校4ヶ年分の生徒と、それから補習科が3箇年ぐらいに分かれている。つまり7つの学年にわたる生徒たちを一人で教えているのである。しかもその7学級内外の生徒の総数が30人ばかりだったから、1学年当たりの生徒数は5人平均とはなかった。

教室は1つで、前の方が高等小学校、後列が補習科である。先生が自分でチリンチリンと鈴を鳴らすと、生徒は自分の席に着く。教授の方法としては小学校を2つに分け、補習科を1つにしていた。そこで1つの組が終わるまでは他の組は、予習をして待っていないなくてはならぬ。

一人で7つの学級を教えるのだから、地理も歴史も、代数も幾何も、英語も漢文も、すべてこの先生一人で受け持たなくてはならぬ。どれだけ学問が深かったかは、子供として知る由もなかったが、ただこの先生が何でも知っているのには驚きを禁じえなかった²⁰⁾。

同様に研成義塾出身者であり、銀座ワシントン靴店を創業した東条驥が寄稿した「常識の修養」には、以下の記述がある。

この塾はまことに風変りな学校で、生徒は3,40人もいたろうか。その全員、全クラスが一つの教室で、下級は高等小学校1年生から4年生まで、その上に、何といいましたか、補習科とも呼べる、私たち小学校をすんでなお向学の志をすて得ない者が2学年あって5,6人ずつおり、漢文・英語・数学・国語などを教わりました。(中略)

この5つも6つものクラスを井口先生が全く一人でひと手に受持つのです。ある時は一緒に全クラスを通じての課目を、ある時はおのおの個々別々の課目を、ちょうど昔の寺子屋を複々式でゆく仕方でありましたから、まるで千手観音そのままです。それが毛ほどの混雑を見せず、かつ至極手厚く行届いた教授ぶりには、たまたま参観に来た教師方は、感服する前に、まず不思議がるように見受けました²¹⁾。

以上の寄稿から、井口喜源治の研成義塾での具体的な教育実践を垣間見ることができる。

3 井口喜源治の教育実践における現代的意義

「2 井口喜源治の年譜と教育実践」では、私塾である「研成義塾」が設立されるまでの経緯、研

成義塾の教育方針及び具体的なカリキュラムや教育実践等について確認することができた。明治、大正、昭和の中での教育実践であったが、現代の学校教育においても示唆に富んでいる。例えば、以下の3点が指摘できる。

まず、一つ目についてである。先述した「研成義塾設立趣意書」の中の6つの企図の中の「三、我が塾は天賦の特性を発達せしめんことを期す」²²⁾においては、個々の学生の特性に応じた教育をすることが目指されている。相馬黒光の寄稿からもそのことが窺える。この時代はICTの活用はなかったが、中央教育審議会「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)」(令和3年1月26日)で示された、「個別最適な学び」における「指導の個別化」及び「学習の個性化」とも通ずる²³⁾。また、「六、我が塾は社会との連絡に注意す」²⁴⁾においては、社会に開かれた教育が目指されている。知名の士人等の地域の人的資源の有効活用など、カリキュラム・マネジメントの三つの側面として指摘されている、「③ 教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること」²⁵⁾とも通じる。加えて、晩学篤志の人を導くなどは、今のリカレント教育にも通ずる。

次に、二つ目についてである。先述した「研成義塾時間表」から、英語の授業の重点化など社会の変化等に対応したカリキュラム編成がなされていたことが窺える。現行学習指導要領により、ようやく小学校段階(5,6年)において、教科としての「外国語」が、週2コマ程度位置付けられるようになった。当時の井口の先見性の高さが窺える。

最後に、三つ目についてである。それは、実際の授業運営である。特筆すべき点は、全ての教科を井口が一人で指導し、更に他学年の生徒も指導していた点である。先述した教え子の東条が回想しているように、今でいう複式学級の授業方法(例えば、「わたり・ずらし」など)を用いて授業運営を行っていたことが推察される。また、教え子の清沢は、井口の全教科を指導できることの学問の深さに対して、東条は、井口の授業方法を「千手観音」として、それぞれ敬意を表している。

現代の学校教育に置き換えるならば、小学校を除き、中学校及び高等学校では各教科等の専門性が求められることから、全教科を一人の教師が指導することは現実的に難しい。しかしながら、自身が専門とする教科等の指導力の向上は必要である。また井口は、学年の異なる指導を「千手観音」のように指導していたが、その前には、先の「三、我が塾は天賦の特性を発達せしめんことを期す」²⁶⁾の箇所では指摘しているように、子細に学生の性情を察すること²⁷⁾がまず基盤にあると言える。このことをなくしては、個々に応じた生ける指導を与えることはできない。「個別最適な学び」を導く上でも重要となる。

以上の井口喜源治の教育実践は、現代の学校教育においても極めて示唆的である。

4 「教育課程論」及び「教育方法論」への教材化の可能性

4.1 先行実践

4.1.1 「道徳教育指導論」での教材化

「井口喜源治」の教材化の試みとして、第一筆者の担当科目である「道徳教育指導論」(3年生対象)の模擬授業の学習指導案作成の導入として、15分程度の「模範授業」²⁸⁾(2022年11月23日実施)を実施した。第一筆者が教師(授業者)役、受講学生は生徒役となり、「井口喜源治」を

表 3 模範授業 学習指導案

1 主眼 ・井口喜源治の業績等に触れることを通して、井口の願いに共感し、自分が理想とする「よき人」について考えることができる。				
2 展開				
段階	学修活動	予想される動き	指導上の留意点・評価	備考
導入 3分	1, 本時の学修内容を知る.	<ul style="list-style-type: none"> ・今日は何やるんだ？ ・井口喜源治は聞いたことがないな. ・長野の人？ ・ペスタロッチだから教育者？ 	<ul style="list-style-type: none"> ・「信州のペスタロッチ」と呼ばれている理由について考えさせる. 	
展開	2, スライドを基に井口喜源治の業績に触れる.	<ul style="list-style-type: none"> ・キリスト教信者だったんだ. ・迫害を受けたんだ. 自分の理想とする学校(私塾)を建てた人なんだ. ・萩原碌山との関わりもあった. ・ゴードン平林とも間接的に関係しているんだ. 	<ul style="list-style-type: none"> ・スライドを提示しながら、語り掛けるように進めていくようにする. ・スライドで聞きなれない言葉(用器画など)について解説も加えていく. 	スライド
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> 【中心発問】 あなたが理想とする「よき人」とはどんな人ですか？ </div>			
10分		<ul style="list-style-type: none"> ・自分の理想を追い求める人 ・粘り強く頑張れる人. ・進んで苦勞を受け入れる人. 	<ul style="list-style-type: none"> ・井口ではなく、自分自身が考える「よき人」について考え、LMS に書き込ませる. ・全体でシェアさせる. <p>【評価】 井口喜源治の業績等に触れることを通して、井口の願いに共感し、自分が理想とする「よき人」について考えることができたか、LMS の記述から評価する.</p>	
終末 2分	3, 本時の感想をまとめる.	<ul style="list-style-type: none"> ・長野にすごい先生がいたんだな. ・井口喜源治記念館に行ってみたいな. ・身延山の話もちよっとよいかも. 	<ul style="list-style-type: none"> ・LMS に書き込ませ、全体でシェアさせる. ・更に、「追加資料」を範読して余韻を残す. 	補助資料

教材として扱うこととした。この模範授業の目的は、次の二つある。すなわち、①中心発問の位置付け方の師範、②「地域教材」を用いた授業設計の例示、である。具体的には、井口喜源治記念館のホームページの内容をプレゼンテーション・ソフトで整理してまとめ、それを授業で提示しながら進めた。この模範授業の学習指導案は、表 3 の通りである。

4.1.2 受講生の感想

受講した学生の感想を表 4 で示す。この感想は、学生が LMS に書き込んだものを打ち出したものである。書き込ませた時間は、模範授業内で実施したため 1 分程度となっている。そのため、ごく簡単な内容となっている。ここで、本授業を受講した学生 80 名の全感想を紹介する。なお、受講し

表 4 受講生の感想

- ・しっかりと話を聞くことができたが理解をすることは難しかった。
- ・身延山の揭示物と井口喜源治の「よき人」は同じことを言っているのではないかと感じました。なにか、良いことをしようかと思うことはなく普段の生活の中で自ら築くことに努めるということが「よき人」につながると思いました。
- ・よき人とは何かを考えさせるのは道徳らしかった。
- ・授業内容を理解して指導案を作ることが大切だと思った。
- ・井口喜源治について考えることができたし、その人に関連する人についても知ることができてよい学びとなった。よき人については難しかった。
- ・良き人について考えることができた。上に立とうとか偉くなろうという野心は少なからず持つべきではないかと感じた。
- ・身延山の住職の言葉が良かった。自分の理想の良き人を考えることが難しかった。
- ・よき人について考えるきっかけになった。難しい言葉や聞き慣れない言葉を噛み砕いてわかりやすかった。
- ・井口喜源治にしっかりと触れられており、指導案通りでいい授業でした。
- ・宗教的な部分を取り上げる授業は難しそうだったが、わかりやすく丁寧な授業だと思った。
- ・しっかりとよき人とはどんな人かというなど発問したりして井口という人についても理解できた。
- ・聞いた事のない科目ばかりだった。パワーポイントが見やすかった。
- ・話しかけるような口調で授業していて分かりやすかった。
- ・導入 も一ちょっと欲しいかもです。
- ・最初に誰もが知っている新宿中村屋と関連付けることで興味を引かせ、時間割などを現在と比較させたり、最後は山梨の地域の話を取り入れることで、身近さを感じられた。
- ・最初の説明によって、より中心発問を多様な経験から導けた。
- ・自分が思うよき人について授業を通して考えることができた。
- ・井口喜源治という人物がどのような人であったのか自分たちの疑問から入り最終的に疑問から答えに導くことができるとやりがいを感じるなど思いました。
- ・「偉い人」と「良き人」の違いは難しく、基準も人それぞれだと思うが、自分が考える「良き人」になれるように過ごしていきたいと思った。写真もあって、身近な例えも多くてわかりやすかった。
- ・短い中でも要点がしっかりと伝わりわかりやすかった。
- ・内容は難しかったけど、その知識的内容よりも良き人とはどんな人かなど考える内容にはなつたと思えました。
- ・わかりやすくてよかった。
- ・指導案通りこんなにスムーズに進めることができるもんなんだと思った。
- ・非常に納得できました。
- ・道徳の指導案や井口喜源治さんの内容を扱っていて、難しいかなと思ったけど内容を知ると生徒も取り組みやすいと思えました。
- ・こんな感じで授業をすればいいのだとわかった。
- ・15分といった短い時間で簡潔に、しかし内容は濃く素晴らしい授業でした。
- ・形成義塾について理解することが出来たし、偉い人ではなく良き人になれるということがよく心に染み入ることができた。
- ・よき人についてかんがえることができた。
- ・井口喜源治の人生の流れに沿って説明されていて勉強になった。
- ・わかりやすく、まとめられていた。
- ・取り上げた人物がどのようなことをしてきたのか、どのような考えを持っていたかを知って、自分の考えを深めることはとても効果的だと思った。教材的には、資料をしらべ集めることは大変そうに思えた。
- ・写真や表を活用したりパワーポイントが見やすかったです。
- ・中心発問の内容は難しくないので理想の生き方について考えることが出来て良いと思えました。
- ・今回の授業では井口喜源治さんについて学ぶことが出来た。
- ・難しい内容だと思うが、少しは理解することができた。自分が授業者になって、このような宗教的なものを使った授業ができるかと言われれば、とても難しいと感じた。生徒の動きを予想することが大切であると感じた。
- ・「よき人」の感じ方は人それぞれだと思えました。とても考えさせられました。
- ・よき人について自分の考えを出すことができ、身延山の話聞いてまた新しい考えについても見つけることができる授業だった。
- ・要所要所で工夫がされてて、参考になった。
- ・とてもよかった。(2名)
- ・自分がなりたいものを考えられた気がする。
- ・とても分かりやすい授業で、生徒に考えさせる発問が生徒にとって良い影響を与えるような発問だった気がしました。
- ・よき人のありかたが多少わかった気がします。
- ・人物がどんな人だったのかやその人と関わりのある人はどんな人なのかなどが分かりやすく、発問も考えやすいものだった。
- ・全体的にとってもわかりやすかった。
- ・わかりやすかった。(2名)
- ・授業内容が筋が通っていて分かりやすかった。生徒に問いかけながら授業していたので分かりやすかった。
- ・井口喜源治記念館に興味を持った。
- ・授業を受講してみて、生徒に印象をどうやって残すのが難しいと思った。
- ・考えさせられる授業だった。
- ・ポイントがわかりやすい。自分の中でしっかりと発問について考えることができた。
- ・道徳の授業の行い方がわからなかったのでも参考になりました。
- ・主要人物だけでなくそれに関係する人も説明していて繋がりがわかった。
- ・長野県にそんなすごい先生がいたのかと思いました。
- ・追加資料でさらにグッと考えさせられたなと思いました。
- ・隣の県にこんなにもすごい業績のある先生がいてすごいと思った。
- ・身延山の文章がいい言葉だなと思いました。
- ・こんな風に見える気がしなかった。
- ・最後の言葉がとても印象に残った。井口さんの願いを持って生きていきたいと思った。
- ・自分が考える「よき人」の定義づけができた。最後の資料はとても納得した。
- ・話の内容が入ってきやすかったし、発問も考えやすい内容だった。
- ・分かりやすい内容だった。
- ・授業の進め方などを学ぶことができた。
- ・井口についてよく知れました。
- ・考え方が勉強になりました。
- ・自分自身がこの授業をすると考えたとしても難しいと思った。
- ・短い時間だけど、作り込まれているなと感じた。
- ・資料が多くて想像しやすく、考えやすかった。
- ・「偉い人」ではなく、「良い人」になるという言葉が印象深かった。
- ・内容が伝わってきて人物について把握することができた。
- ・全て初めて知った事だったので情報が新鮮だった。
- ・当時と今を比べることができ理解がより深まった。
- ・井口喜源治のルーツなど、深いところまで知ることが出来て良かったです。
- ・スライドの文字の色が変えられたりしてとても見やすかった。
- ・こんな先生がいたなんて知らなかったです。
- ・なるほどと思った。
- ・関連資料や関連知識を多く用いて、本当に伝えたいことを上手く伝えていたなと感じた。
- ・とても参考になった。

た学生の感想等の公表に関しては、山梨学院大学倫理審査委員会の議を経ている(受付番号: 22-012, 2022年9月21日承認)。

4.2 「教育課程論」及び「教育方法論」の教材化の可能性

井口喜源治を教材とした「模範授業」の感想として、表4より「難しい」と感じた受講生が何人かいたが、全体として肯定的に「模範授業」を受けとめていることが確認できる。特に、「難しい」と記した学生の感想を分析すると、スライドの内容の難しさ、中心発問に関する「よき人」の捉え方の難しさ、教科書ではなく自作資料を扱うことの難しさ、井口がキリスト教徒であったことから、公教育の中で教材としての扱い方の難しさ等が要因として考えられる。

これらの点に留意しながら、「教育課程論」及び「教育方法論」における教材化について検討する。具体的には、「3 井口喜源治の教育実践における現代的意義」で述べた内容を基に、双方のシラバスの授業計画で扱うことが可能な箇所(各授業のコマシラバスを設計する上で受講する学生の理解を深めたり、興味・関心を喚起させたりするための教材として活用可能な箇所)があるかどうか検討することとする。

まず、「教育課程論」から検討する。このシラバスの授業計画(2024年度版)²⁹⁾は、以下の表5の通りである。こ15回の授業計画の中で、第13回の「カリキュラム・マネジメント(1)」(学習指導要領に規定するカリキュラム・マネジメントの意義や重要性)及び第15回の「カリキュラム・マネジメント(3)」(田村知子の「カリキュラムマネジメント・モデル」³⁰⁾とその活用事例の分析)で利用可能である。第13回では、カリキュラム・マネジメントの意義や重要性を扱う場面で、カリキュラム・マネジメントの三つの側面の中の「③ 教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も

表5 「教育課程論」の授業計画

<ul style="list-style-type: none"> ・第1回:教育課程の意義(1)(学習指導要領の性格とその位置付け及び教育課程編成の目的) ・第2回:教育課程の意義(2)(学習指導要領の改訂の変遷及び主な改訂内容並びにその社会的背景①:194年版～1958年版の学習指導要領) ・第3回:教育課程の意義(3)(学習指導要領の改訂の変遷及び主な改訂内容並びにその社会的背景②:1968年版～1989年版の学習指導要領) ・第4回:教育課程の意義(4)(学習指導要領の改訂の変遷及び主な改訂内容並びにその社会的背景③:1998年版～2008年版の学習指導要領) ・第5回:教育課程の意義(5)(現行の学習指導要領の特徴と改訂の社会的背景) ・第6回:教育課程の意義(6)(教育課程が社会において果たしている役割や機能) ・第7回:教育課程の編成の方法(1)(教育課程編成の基本原則) ・第8回:教育課程の編成の方法(2)(「主体的・対話的で深い学び」(アクティブ・ラーニング)を実現するための教育課程の編成と指導計画の作成) ・第9回:教育課程の編成の方法(3)(教科・領域を横断して教育内容を選択・配列する方法①:「クロスカリキュラム」の理論とその実践事例の分析) ・第10回:教育課程の編成の方法(4)(教科・領域を横断して教育内容を選択・配列する方法②:新潟県上越市教育委員会による「視覚的カリキュラム」の考え方や作成方法の分析) ・第11回:教育課程の編成の方法(5)(単元・学期・学年をまたいだ長期的な視野から、また生徒や学校・地域の実態を踏まえて教育課程や指導計画を検討することの重要性①:山梨県甲府市立A中学校の教育課程及び指導計画の事例分析) ・第12回:教育課程の編成の方法(6)(単元・学期・学年をまたいだ長期的な視野から、また生徒や学校・地域の実態を踏まえて教育課程や指導計画を検討することの重要性②:山梨県立B高等学校の教育課程及び指導計画の事例分析) ・第13回:カリキュラム・マネジメント(1)(学習指導要領に規定するカリキュラム・マネジメントの意義や重要性) ・第14回:カリキュラム・マネジメント(2)(カリキュラム評価の基礎的な考え方) ・第15回:カリキュラム・マネジメント(3)(田村知子の「カリキュラムマネジメント・モデル」とその活用事例の分析)
--

含めて活用しながら効果的に組み合わせること³¹⁾で、井口喜源治の研成義塾での教育実践の紹介が可能である。明治時代の小さな私塾で、このような現行学習指導要領で重要視されていることを導入しようとしていた点に受講する学生は興味・関心を高めることが期待できる。また、第15回では、田村知子の「カリキュラムマネジメント・モデル」の「リーダーシップ」³²⁾の説明において、井口喜源治の教育実践を例示し、そのリーダーシップについて紹介することも可能である。ただし、受講した学生が指摘していたように、宗教的な内容の扱いについては十分に留意する必要がある。

次に、「教育方法論」について検討する。この授業計画(2024年度版)³³⁾は、表6の通りである。この15回の授業の中で、第13回の「教育の技術(9)」「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現①:意義と授業実践例)で利用可能である。その中の「個別最適な学び」の例として、井口喜源治の研成義塾での教育実践の紹介が可能である。ここでは、個々の学生の特性に応じた教育をすることが目指されている。特に、子細に学生の性情を察すること³⁴⁾を重要視している点については、受講する学生に納得感を持たせると共に、「個別最適な学び」をさせる上での重要な基盤であることの理解を深めさせることが期待できる。

以上から、「教育課程論」及び「教育方法論」において、井口喜源治の教育実践はそれらの教材としての活用が十分に可能であると言える。

表6 「教育方法論」の授業計画

<ul style="list-style-type: none"> ・第1回:教育の方法論(1)(教育方法の基礎的理論と実践:「教育方法とは?」,「教育方法の史的変遷の概観と現在の動向」) ・第2回:教育の方法論(2)(これからの社会を担う子供たちに求められる資質・能力を育成するための教育方法の在り方:「主体的・対話的で深い学び」(アクティブ・ラーニング)の実現するための教育方法の在り方) ・第3回:教育の方法論(3)(学級・生徒・教員・教室・教材など授業を構成する基礎的な要件) ・第4回:教育の方法論(4)(学習評価の基礎的な考え方と具体的な方法例) ・第5回:教育の技術(1)(話法・板書などの授業を行う上での基礎的な技術) ・第6回:教育の技術(2)(基礎的な学習指導理論:「問題解決学習」等を中心に) ・第7回:教育の技術(3)(目標・内容,教材・教具,授業展開,学習形態,評価規準等の視点を含めた学習指導案の作成①:「単元計画」の作成) ・第8回:教育の技術(4)(目標・内容,教材・教具,授業展開,学習形態,評価規準等の視点を含めた学習指導案の作成②:「学習指導案」の作成) ・第9回:教育の技術(5)(目標・内容,教材・教具,授業展開,学習形態,評価規準等の視点を含めた学習指導案の作成③:「単元計画」の発表と批評検討会) ・第10回:教育の技術(6)(目標・内容,教材・教具,授業展開,学習形態,評価規準等の視点を含めた学習指導案の作成④:「学習指導案」の発表と批評検討会) ・第11回:教育の技術(7)(目標・内容,教材・教具,授業展開,学習形態,評価規準等の視点を含めた学習指導案の作成⑤:模擬授業の実施・授業批評会) ・第12回:教育の技術(8)(目標・内容,教材・教具,授業展開,学習形態,評価規準等の視点を含めた学習指導案の作成⑥:模擬授業の振り返りと次なる授業改善) ・第13回:教育の技術(9)('個別最適な学び'と'協働的な学び'の実現①:意義と授業実践例) ・第14回:教育の技術(10)('個別最適な学び'と'協働的な学び'の実現②:「学習指導案」の作成) ・第15回:教育の技術(11)('個別最適な学び'と'協働的な学び'の実現③:「学習指導案」の発表と批評検討会)
--

5 おわりに

以上、本稿では、第一筆者が参加している「学ぶ会」での学習成果の第一次報告として、井口喜源治の教育実践の現代的意義について考察し、更に第一筆者が担当する教職科目「教育課程論」及び「教育方法論」における、井口喜源治の教材化の可能性について検討した。検討の結果、「教育課程論」及び「教育方法論」における、井口喜源治の教材化は、双方の授業において

実現が可能であることが確認できた。

今後は、第二筆者、第三筆者と共に、「教育課程論」及び「教育方法論」の双方における井口喜源治を教材化した「コマシラバス」を作成し、実際の授業実践を通して、この教材化の有用性について第二筆者を中心に検証する予定である。今後の課題としたい。

注・引用文献

- 1) 井口喜源治記念館ホームページ, <http://kigenji.jp/> (2023年12月29日検索)。
- 2) 同上書 1), <http://kigenji.jp/> (2023年12月29日検索)。
- 3) CiNii Resarch で、「井口喜源治」をキーワードで検索したところ、全 34 件という結果であった (2024年3月20日検索)。その中で、井口喜源治の教育実践について扱ったものもあるが、それらは、キリスト教等の視点から捉えたものとなっている。
- 4) 丸山毅編『井口喜源治』井口喜源治記念館, 1978年。なお、本文献は、研成義塾教友会と信濃教育会の後援のもとに1953年に発行されたものを井口喜源治記念館が再版したものとなる。そのことの具体的経緯については、本文献の p.222 に詳しい。
- 5) 同上書 4), pp.1-6.
- 6) 表 1 への引用方法等に関しては、井口喜源治記念館館長の尾臺鞆一様の了解を得て行った (2024年2月3日)。
- 7) 井口喜源治記念館ホームページ, 「研成義塾」, <http://kigenji.jp/14706218616480> (2023年12月29日検索)。
- 8) 前掲書 4), p.9.
- 9) 前掲書 4), pp.9-10.
- 10) 前掲書 4), p.9.
- 11) 前掲書 4), p.9.
- 12) 前掲書 4), p.9.
- 13) 前掲書 4), p.10.
- 14) 前掲書 4), p.10.
- 15) 前掲書 4), p.10.
- 16) 前掲書 4), p.10.
- 17) 井口喜源治自筆の研成義塾時間表は、前掲書 4), p.83 を参照。なお、表 2 は、井口喜源治記念館館長の尾臺鞆一様の了解を得て作成したものである (2024年2月3日)。
- 18) 前掲書 4), p.83.
- 19) 前掲書 4), p.98.
- 20) 前掲書 4), p.114.
- 21) 前掲書 4), pp.119-120.
- 22) 前掲書 4), p.9.
- 23) 中央教育審議会『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)』令和3年1月26日, https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf, pp.17-18 (2023年12月29日検索)。

- 24)前掲書 4), p.10.
- 25)中央教育審議会「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」(平成 28 年 12 月 21 日),
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf, p.24 (2023 年 12 月 29 日検索).
- 26)前掲書 4), p.9.
- 27)前掲書 4), p.9.
- 28)「模範授業」に関しては, 大前暁政の論考が参考となる. 大前暁政「教育方法と授業技術を意識化させ, 習得させるための『教育方法論』の実践」『教師学研究』16 (0), 2015 年, pp. 1-11 に詳しい.
- 29)山梨学院 UNIPA, <https://unipa.ygu.ac.jp/uprx/up/bs/bsa001/Bsa00101.xhtml>.
- 30)田村知子編『実践・カリキュラムマネジメント』ぎょうせい, 2011 年, p.7 に詳しい. ここでは, 「カリキュラムマネジメント・モデル」が示され, その各要素として, 「教育目標」「カリキュラムの PDCA」「組織構造(人, 物, 財, 組織と運営, 時間, 情報など)」「組織文化(広義)(カリキュラム文化, 組織文化(狭義), 個人的価値観)」「リーダーシップ」「家庭・地域社会等」「教育課程行政」などが挙げられている.
- 31)前掲書 25),
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf, p.24 (2023 年 12 月 29 日検索).
- 32)前掲書 30), pp.9-11. ここで田村は, 中留武昭編『学校文化を創るリーダーシップ』エイデル研究所, 1998 年から引用して, リーダーシップのスタイルとして, 直接的に教育活動で指導性を発揮する教育的リーダーシップ, 教師が働きやすいように条件整備に力を入れる管理的リーダーシップ, 学校にポジティブな文化を醸成する文化的リーダーシップがあることを紹介している.
- 33)前掲書 29).
- 34)前掲書 4), p.9.

謝辞

本稿を作成するにあたり, 井口喜源治記念館館長の尾臺鞆一様をはじめ, 「井口喜源治先生に学ぶ会」の会員の皆様には, 井口喜源治記念館ホームページ及び丸山毅編『井口喜源治』井口喜源治記念館, 1978 年からの引用方法等のご承諾を始め, 本稿作成に関わるご助言等, 多大なるご協力を賜りました. この場をお借りして深くお礼申し上げます.